

永井龍男
田宮虎彦
梅崎春生
集

日本文学全集 51



筑摩書房

日本文学全集 51

永井龍男 田宮虎彦 梅崎春生 集

昭和四十五年十一月一日発行

著者

永井龍男 田宮虎彦 梅崎春生

発行者 竹之内静雄

発行所

株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版 株式会社精興社

本文印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所

永井龍男集 目次

黒い御飯

絵本

手袋のかたっぽ

『あいびき』から

胡桃割り

朝霧

青電車

五 うねり

八 白い犬

一〇 白い柵

一四 少年唱歌隊

一五 蜜柑

一六 一個

一七

五

五

五

七

一三

一九

田宮虎彦集 目次

無花果

霧の中

天路遍歴

落城

二九 土佐日記

三三 足摺岬

三六 鷺

三七 絵本

一六

二二

二五

二七

ぎんの一生

二九

銀心中

三六

梅崎春生集 目次

桜島

三七

空の下

四〇

日の果て

三三

Sの背中

四二

輪唱

三六

紫陽花

四四

年譜

四六

人と文学

永井龍男

佐伯彰一

四九

田宮虎彦

篠田一士

四六

梅崎春生

佐伯彰一

五〇

口絵写真撮影（田宮虎彦） 雨宮 淳

永井龍男集

死後 文庫本の中に

一冊の短篇集を

遺し得るかどうか

永井龍男

黒い御飯

小学校も卒える事が出来ずに、小さい時から工場通いを仕続けてきた兄が、工場の帰りにカバンを買って来てくれた。A社の給仕に出ている二番目の兄がそれへ名前を書いてくれる。

そうして明治何年かの四月一日、母はいそいそした私の手を引いて小学校の門をくぐった。私はきつと、次兄の着古した紺飛白の縫い直したのを着、新しいごわごわの袴と、新しいカバンと新しいびかびかする帽子をかぶって、然し、傍の者から見た私の姿は、袴にはかれ、帽子にかぶられ、カバンに下げられていたに違いない。きつとその日は好い天気であつたらう。

父は体が弱かった。八九年も、同じ印刷所の校正係をつとめていた。その間に、他の仲間達はどんどん好い位置を占め、社も発展して行つた。しかし父はいつもガラス戸のはまった寒い、暑い校正室の中で、赤い筆を持っていた。

——私はよく其処へ、夜業のある時などにお弁当を届けに行つた。蚊をつぶした新聞紙のようになった、校正刷りが沢山あって、印刷所特有の、鉛や、紙や、インキの湿った臭いが、薄暗くなった狭い室の間にただようていた。

明り取りのすりガラスが鉛色に明るく、夕暮のもつ蒼さに透いて、やせた父の頭の上に四角くあつた。

「とうさん、ほんの一寸しか箸をつけなかつたんだが、お前たべないか」

或る時（あるいは二三度ばかり）父はそう云って、昼に弁当屋からとつた弁当の残りを差出したことがあつた。平生私は、父をけちんぼだと思つていた。父がけちんぼなのを考えると悲しくなることもあつた。薄暗くなった室の内で父の視線と私の顔が会つた時、私はそれをよけて不機嫌に云つた。

「たべない」

私は憂鬱になつた。どうしてこんなことをする父であらう。残つたものなんか、さつさとやつてしまふにいいのに。

私は横町の家へ帰つてからも、つまらなかつた。

家からその印刷所へ行く迄の十五分ばかりの道に、其処には活動写真などもあるのだが、五日おきに縁日がたつた。恰度、お弁当を持って行く日が縁日であつたことがある。縁日には、近所の子供達が申し合せたように、二銭ずつ貰うのが例であつた。私も、昼間のお小遣を貰わないかわりに二銭ずつ貰つた。その日はお弁当を持って其処へくる迄、

縁日を忘れていた。無論、昼間の分はつかった私は、はつとした。母はもう一銭しか呉れない。皆が二銭ずつ持っているのに、自分には一銭しかないということが、どんなに寂しいことであろう。

「父にねだって見よう」

道を歩きながら私は考えた。それは可成云いにくい望みの無いことだった。父はけちんぼだったから。包みからお弁当を出して、もじもじしていたが、思い切つて云つて見た。父はがま口から二銭銅貨を出して、私の手の平へのせてくれた。あの大きな重い二銭銅貨を。(こんなことのある世いであろうか、今でもあの不便な二銭銅貨は、ひと昔とでも云つたような懐しい重みを持っているように感じられる) そうして、その夜は^{だんごん}大尽にでもなった気で縁日を歩き廻った。

父は小心な、曲つた事の出来ない(しかし道で拾つたぼつちりの金ならば、そつと了つておくような)ほんとうの小人であった。不孝者の私は父を吝嗇な人と思つていた。しかし、父はそれより仕方なかったのだ。父は咳が出た。それには永い間葉がいった。それに、私達のような暮しをしている者には、明日の保証が一寸もないのだ。殊に父のような病弱な人にはその感じが強かつたであろう。

「もし明日にでもどうかしたら……」

何事に対しても先ず父の頭へはそうした言葉がひらめいたであらう。父は少しづつ、少しづつ、恥かしい程少しづつ

貯蓄をした。

頬のこけた、髭をはやした顔、そうして自分で染直した外套を着て、そろそろ、そろそろ、下駄を引摺るようにして歩いてくる父の影が、私の心へ蘇る。それは、もう可成病いが重くなつてからの姿だ。父はいよいよ動けないという日まで勤めた。

虎ちゃんという、いつも頓狂なことを云つて笑わせる私の友達の子は、私達の仲間の前で突然こんなことを云つたことがある。

「たっちゃんとこのお父つあん偉いんだつてさあ!」

「何故?」

仲間達の顔と顔を見比べる虎ちゃんの悪戯な顔を、私は薄気味悪く、そして間が悪るげに見詰める。

「だって髭をはやしているんだもん!」

そう云つて虎ちゃんは、げらげらと高笑いをする。

「ちえっ! 髭をはやしているもんはどうして偉いの、えっ虎ちゃん」

私は激しい恥辱を感じて突掛つて行く。すると他の仲間が、とどけた事を云う。

「あたい髭をはやした電車の運転手を見たことがあるよ」

そう云う私達の、子供らしい皮肉のまじつた会話は、私の父が大儀そうに社から帰つてきて、私達や仲間の傍を通つて行った跡の、夕暮の中で交されたような気がする……。然し、余り父の事を語りすぎた。

その明治何年かの四月一日の夜、私達一家は御膳をとり囲んでいた。話題は私の初登校のことであつたろう。父は時々酒を飲んだ。その夜も一本の酒が父を上機嫌にしていた。「御星敷の御婆さん」と母達に呼ばれている、昔御殿女中をしてゐた養母に育てられた父は、酔うと余計に切口上になつた。私は私が一家の内で大変幸福者であることや、従つて一生懸命に勉強しなければならぬこと、皆の恩を忘れてはいけぬ事などを、説き聞かされて涙ぐみながら御飯をたべた。私達の前にはひっそりしたおかずがある。こうした父の説教は一度や二度のことではなかつた。私はそれが大嫌いであつた。自分だけがうんと重荷を負わせられているような気がして堪らなく憂鬱になる。泣虫の私の眼から溢れる涙は貧乏に生れついたのを^{なぐさ}しく思う涙で、決して病氣と戦い、生活と戦う父や、一年中手の平のざらざらしている母や、小さな時から工場や会社へ勤めつづけてきた兄達への、感謝の涙ではなかつたのだ。

母は、一同の食事の終る頃に、私が明日から学校へ着て行く普段着が、余りに汚れていることを思い出した。そして、次兄の古いかすりがあるが、あれではあまりひどいと思うとつけ加えた。母はそれを縫い直して呉れようかと云うのだ。父はその紺がすりを見た。それは大分色が落ちていた。父はそれを染めてやるという。母は危ぶんだ。紺がすりを丸染めにしては、変なものになつて了うからだ。しかし父は受け合つた。

「子供の着るものなんか、さっぱりしていさいすればなんでも好いんだ。あした少し早く帰つてきて俺が釜で染めてやる」

父には、自分のやけた外套を染め直した経験があつた。

狭い台所は、釜から登る湯気で白かつた。たすきをかけた父が、湯気の中で動いている。引窓を見上げると星がもう光っている。

釜の下では薪がぼうぼう燃えている。釜の中には黒い布と黒い湯とがにえたぎっている。父の手首も黒い。(父は一生懸命になると、よく鼻汁が髭を伝つた。自分の眼鏡の蝶つがいを外して、細工をした時などの様子が眼についている)

さて、翌日のことだ。綺麗好きの母が、あれ程よく洗つた釜で炊いた、その御飯はうす黒かつた。うす黒い御飯から、もうもうと湯気が上つた。

「赤の御飯のかわりだね」

誰かがそんな事を云う。染められた紺がすりは、まだ乾き切らずに竿にかかつていた。

幾日かの後、私はその染直した妙な紺がすりを着て、一年生の仲間に入つていたことであらう。

私も、「前途有望な少年」であつたのだ！

(大正十二年七月)

絵本

雨が降っている。古風な機関車が真白な煙りを吐いて止っている。それは葱をふみ乍らき耳立てた雄ん鶏に似ている。バラソルの骨のように、線路は停車場へたぐられる。お前の電車が一生懸命で駅へ走る。赤い陸橋を斜に抜ける。シグナルの色は次第に濃くなる。貨物車は海ぎわに幾筋にも列んで、雄ん鶏の来るのを待っている。海の上にひろがる空は黄ばんで霽れそうに見える。海は、古いフィルムを一杯にはぐしたり、透かして見たりしている。夕方の白さが駅を中心にして何処にも見える。

山の手の森の中の家に灯がつく。

駅の中は夕刊のにおいがする。車掌の手袋は汚れている。停車場は顔を持っている。

お前は其処からホテルへ行く。お前のタクシーは天燈虫のように、ゆるい坂から山の手へのぼる。ホテルには日本人が沢山いる。沢山の日本人がほんとうにいる。お前も黒い服で椅子に倚り、時を待つ。威張った東洋人はみな毀れている。日本人のお前がそう考える。わざとお前は色々の

事を考える。結婚式がとうとう始まる。親戚は皆似ていない。弟は若くて兄貴は年取っている。白い長い卓子の上に、明るい酒と赤い酒と黄色い麦酒がおの小さな影をつくって行く。えらい参観人のある日の孤児院の食事に似ている。お前は胸に白いナフキンを四角にひろげて行儀よく待つ。パンの脇に一人ずつ日本人がいて口を動かしている。タル博士やフェザア教授は何処にいる？ 段々不思議な気がしてくる。

お前のキスして別れた花嫁と、お前を知っている大柄な花婿が並んでいる。

お前はナイフとフォークで曲芸がしたくなる。伊勢海老が皿の上でにらむ。お腹がよくなると仲人が立ち上る。次の人が立つ、皆の体がほどけて御婦人は色をばらばら落す。当り前な気がする。不思議な気がする。知っている人がある。知らない人がある。子供の時に見た絵本の中の、魚の宴会が動き出す。

皆立上る。椅子がきしる。シャンパングラスを差上げる。シャンデリアの光が激しくグラスへはいる。様々な親指の腹の指紋のうずまきが一樣にお前へ拡がってくる。眼まいがする「花婿よ、お前の鼻のちいさからんことを」

負けた西洋将棋がばらばらになる。酒場で。お前はホイルバックの強い曲りに片腕かけて、味の濃い酒を時々取上げる。小さな舞台に幕が下りたばかり、カップやグラスの触れ合う音が、風のある日の椎の木

林の中の、雀のさえずりか陽射しのようにな、人々の語り合う中から光る。お前の、テールブルの陰に重なったエナメル
の靴には、もう、うっすりほこりがたかっている。

裏口の料理場の窓から投げられたすっぱい輪切のレモン
が、ごみ箱の蓋について、その儘凍ってう。鼠は暗がり
でひげの根もとを両手でかいている。

お前はこんな隅の方に気持のいい居場所を見付けたお前
の機転をほめる。落着いてのんびりしているお前の知らないお前
の酔い。夜が更ける、踊り子はやっぱり寒むそうに見える。
踊り子の腕の白粉がお前の黒い羅紗に残る。

「お前の夢を見るよ」

一人の男を送り乍ら、うしろから女がそう云うのをお前
は遠くで鮮明きく。男の手は一枚の札を握って女の手に
くるまれる。男は動き出す。ボオイがオーバーにくるんで
戸外へ捨てる。女はチップを胸へながし込む。小魚を呑ん
だ黒い鵜のなまめかしさに似ている。女は舞台に倚りかか
って煙草を喫う。何気ないようで、女は又小魚をさがして
いる。両ひじを舞台へおせて、まだ生きている魚の動きを
腕の中に見せる。お前は女の視線へ人差し指を上げる。に
こりともせずに女はものなれた翼のゆるやかなひとあおり
で、人々の間をぬけてくる。となりへ腰かけて、重くない
女はつまらない。女は喫みさしの煙草をお前の口へはさま
せ、お前の胸の手布を抜いて己れの口のまわりをふく。強
い酒がくる。

やがて酔ったお前が立上る。ポケットへ手を入れて札を
握る。お前の手は女の手の中にある。お前は憎む。

「お前は何が欲しい？」

女は酔ったお前を見さらしてから、

「いろさ！いろを」そしてすかさず早口に突いてくる

「お前は？お前は何が欲しい」

「俺か！？」

お前は女を力一杯突飛ばしたい。

「俺は生きものを！」

「あばよ！」

扉戸のすっかりおりてしまった街をたった一人お前が歩
いている。遠い遠い街角に人影が見えるのだが、すぐなく
なつて了う。街だけが残っている。この扉戸の中には冷た
い胴体模型が立っている。この扉戸の中には冷たい眼鏡と
時計がある。この扉戸の中には堅い腸詰や蒸焼肉が下ら
っている。ドックの船の腹のように、窓のない商店やビル
ディングがならんでいる。お前の息は白く、色々の物かけ
をふんで行く。

この都会を離れた夜汽車は、やきとり紙の火先きのよう
に、もうじきに次の町へつくだろう。

お前は花嫁と花婿を祝福しなければいけない。

お前はうつむいて歩いているうちに、いつか舗道の四角
いしきりに吸込まれて了う。眼が離せなくなる。四角い舗

石は無限に四角につながる。お前は駈けだす。

生きものを！

しきりは網になってお前の足にからんでくる。倒れる。お前は額を打ってその儘動かない。タキシの捨てていった油染んだぼろのようだ。お前は凍った舗道にうつむきに倒れ、薄荷の匂いをかいでいる。お前は鼻血を沢山出したのだ。

人けのない何処かの店の、栓を締め忘れたファウンテンから、どんどんソーダ水があふれている。

「花婿よ、お前の鼻の小さからんことを！」

街燈と並木が出来るだけ背伸びをしている。横顔のようにじっとしている明暗のはげしい街なみ。お前にはもう何も感じられない。お前はお前自身の中に浮んでいるのを楽しんでいて、お前は今夜はもうお袋の家へは帰れない。こんなに静かな街の中で、お前はこの儘こっそりと死んで了うことも出来るのだ。

そうだ、ほんとうに、お前は死んで了うことも出来るのだよ。お前の耳よ聴け。

畜生！ どこかに何かがいやあがる。

(昭和五年二月)

手袋のかたつぽ

私に多少の絵どころさえあれば、一昔前の風物を、たとえば櫛の歯のような窓を持つ蕎麦屋の店、町角に一寸傾いで立っていた紅殻色の自動電話、路地の埃箱の下から萌えた小豆や西瓜の嫩葉、さては玩具箱の底から引出したような、外濠線と街鉄ふたいろの古風な電車などと、思い出すまま心おぼえに描いて置けば、それで気のすむことなのだが。

昭和十×年十一月一杯を、私は満洲見学に費して、それから北京へ入った。旅行の目的は満洲の見学にあつて、北京に寄れたのは全く望外のことだった。久振りに団体から放たれた気分もあつて、眼に映るもの耳に入るものを、その儘土産にするつもりで十日ばかりを其処で暮すことにした。

二日目に、義兄の紹介状を持って、さる開発会社へ×さんを訪ね、大層お世話をかける事になった。宿舎までも親

切をうけて、北京飯店からその公館の一室に移したが、それから二三日は同じ屋根の下に起居し乍ら、多忙な×さんとはゆっくり顔を合やすこともなく、昼間は秘書の×氏の案内で北京のあらましを見物した。

明日あたりから一寸北京を離れ、都合よく行けば大同から更らに包頭まで行つて、再び此処へ戻つて来る——と思ひ立ち、翌の朝は早目に眼を覚したが、窓の外はすっかり曇つていた。気のせいか、曇つた空は日本よりもうす赤く濁っている。相当温度も低いらしいが、簾けの行届いた下男が、今朝も私の眠っているうちに、矮炉を燃やし付けて呉れたらしく、ベッドに起上つてみても寒いと云うことはない。空籬を敲くようなかん高い音に続いて、間のびのした呼び声が、土塀の向うを通り過ぎて行く。なんのことだか少しも分らないが、私は下駄の齒入れをすぐ思い出していた。寢室の上で、絵葉書を二三枚書いた。

窓際の棚に、質の良い、部厚な真鍮のサモワルが置いてある。煙草に火をつけて何気なく其処へ眼がゆくと、手入れの届いた胴のふくらみの辺の輝きが、しきりにちらちらする。庭へ小鳥がきたなど、もの珍しく眼を移したが、小鳥ではなく何時の間にか雨が降つていた。眼を覚した時から降つていたのだろうか。私は再びベッドへ体をのばして、知らぬまにうとうとしたらしい。

「先生、先生」とボーイに起されていた。×さんから電話ということだ。

「出掛けに一寸覗いたが眠つていたので——、寒くなければ、×君を迎いに上げるから出ていらっしやい。初雪の中で烤羊肉を御馳走しよう。ここでは初めてでしやう?」

「初雪?——雪になりましたか」

「そっちは降っていないの」

「いいえ、気がつかずにいました」

うす暗い電話の在り場から、明るさをうかがうようにした私の耳に、×さんの中老らしい穏やかな笑いが聞えた。「すぐ仕度をします」雪と聞いて、旅人の心はずんで来た。

×君が迎えに来て呉れた。成吉思汗鍋は、東安市場の屋上にあるのだそうで、一時に、其処で×さんと逢うというのも好都合であった。土産物も少し求めて置きたいと申出た時、「それでは、さしずめ東安市場へでも、そのうち御案内しましょう。一寸したデパートと、浅草の仲店を一緒にしたような所です」と×君が云つていたのだ。

運転手の鼻の先きで、扇形にゆるく忙しく、硝子の雪が搔かれる。おぼえていた町角。通つて了つてから、ああそうだったと分る丹塗の門。商店の二階の招牌の裏に取付けてあるらしい、開け放しの拡声器が、町へ響き渡らせる歌曲。学校が退けた支那の小学生達が通る、鞆の塀つづき——車の内はほんの少し大藪のにおいがする。雪降りの古い都会を、私は飽かず眺めた。

人通りが多いが、さして広くはない町筋に来て車は止つ

た。一見通り抜けの出来る路地とも見え、東京大阪の間屋町の裏口や裏通りにしも似ている、積上げた商品の間の土間を行くような感じの横町を、私は×君に随いて入った。それが東安市場の幾つかある出入口の一つであった。狭い通路の両側に、靴屋や雜貨屋のウインドが続く。電燈をつけたい暗さの中に、日本の靴屋と異った処もなく見えたこの店も、陳列棚を覗き込むと、どの靴もどの靴もひどくなが細く、間延びのした処が中国臭い。

やがて私達は市場の中央に出た。三間に七間程の長方形の広場に、骨董とも古道具ともいえる種類の品物を陳べた店があって、此処だけは大屋根の硝子の明りとりから、雪の日の光りを受けている。この長方形を中心にして、四方へ通路が延び、それぞれの通路の両側に、色々な店が並んでいると思われた。そして、それらの店々の上に、これから招ばれる料理店もあるのであろう。

——こんな風に書いて来て、実は私の記憶のはずかしい程にうすれているのを知り、思い違ひや一人合点をうまく継ぎ合せようとはかり焦っているのだが、それというのも、この骨董屋の、種々雑多な品々をもの珍しく見て廻り乍ら、私の踏んだ通路の土の、永い間人間の足で踏みかためた、落着いた程よいかたさがしじみ懐しく、懐旧の情を私の胸に沸き上らせたと書いて了えばそれでよいのだ。氣にかけて、人から借りた写真雑誌の東安市場風景は、自転車置場の自転車林や、人だかりした露天の曲芸師、日本人の

一番お気に入りの場所という説明があつて、買物している和装婦人の大写真とか、さては洋杖を小脇の支那紳士が、古書の店で森閑と頁を繙いている処とか、私の追憶の拡がりはこそすれ、お前の思っている通りだと証明してくれるものはなかった。——私は眼に浮ぶ情景を信じてよいのだ。

時間が来て、私は×君に従いて東來順の階段を上った。×さんも、間もなく小柄な姿を現した。たったいま降りかった雪を、黒のソフトにも外套にものせ、やあと云って、私達の前に腰を下して帽子を脱ると、長めに丸刈りにした頭髮も胡麻塩であつた。その×さんの背後へ給仕が来て、親しげな挨拶をした。椅子に寄り乍ら頭をうしろへ振り向け、給仕の顔を見上げるようにして、×さんにもここに何かうけ答えた。

初対面からまだ一週間にもならず、口の重い人で、ものの半時間とはまとまって話したことのない×さんに、こうして向ひ合うと、年長の旧い知人と逢っているような氣持になるのは、こんな姿を傍から眺めている時に、次第に私の心を占めて行つたものであろう。

「車はあつたかい」

「はあ恰度××さんが帰られたので」

×君はいつも調子の変らぬ真面目さに、若々しい学生生活の余韻を残していた。

いまは、日本では殆んど見られなくなった角刈りにした給仕達が、彼等の服の伸びやかさもあつて、何処かひらり

ひらりとした感じで、卓から卓へ忙しく料理を運んで廻る。幾枚かの皿小鉢を、梅鉢の紋のように客の前へ並べて行くのや、ながくて真直ぐではない箸の、ざらざらと卓に置かれるのまでを、私はたのしく眺めた。

「私も烤羊肉はこの冬初めてなので、御礼をいわれるところではない。雪を見たら、すぐ君を引張り出すことにしましたよ」

×さんが、ぼつりぼつりとした口調でそう云った。

給仕が迎えに来て三人は立った。廊下の突当りの扉を開くと、ちらちらと降る雪空の下の屋上へ出た。鍋の下は仕掛は忘れて了ったが、成吉思汗鍋という鍋らしくない鍋は、直径一尺余の七輪のおとしを炮烙を伏せたように中高にしたもので、赤々と火を透かしていた。帯の高さほどのこの鍋を囲んで、粗末な縁台が二三脚置いてある。これへ片足かけて、出汁に浸した羊の肉を焼くのが法だと聞いた。錫の小徳利に入れて、焼酒そっくりな酒を添えてくる。ままごとに使うような小さな杯で、合間合間に含むと、口中の脂が綺麗に消えた。

鍋に就ての間答が一応すんだ処で、×さんが土産物はあったかと云う。

「ええ、二色三色求めましたが、それよりも、あそこで子供時分の事を思い出しました。とても昔の勸工場に似ているような気がしまして」

私はまた先刻の土間の踏み心地や、夜のように電燈をつ

けた店並みを廻らせていた。

「ほお、勸工場。なるほどなあ」×さんの横顔が一寸微笑んだように思われた。

「×君は知らんだろうね」

「はあ、私は——」

「君は」と私へ向いて「何処の勸工場を知っている？」

「東京の神田で育ちまして、駿河台下の東明館がすぐ傍でした」

「東明館なら僕も知っている、学生時代によく行ったものだ」

「学生時代といいますと」

「駿河台のニコライ堂に附属して、神学校というのがありましてね、其処にいました。不思議な処に居ったものさ」

私達は、思い浮ぶまま暫く昔のあの辺の事を語り合った。肩の雪を、手巾で拭い乍ら再び屋内のものと卓子に帰って、更らに二三種の料理が来、甘い支那菓子でお茶を喫んだが、その間もお互いに思い出しては昔話になり、×君をばかんとさせたようにおぼえている。

会社に用事を残した×さんを送り、その車で私は公館へ帰るのだが、昨日北海公園の白塔から見下した街の姿にも、紫禁城の多彩な壁や、巨きな燈や深い石礎の上にも、うっすらと積りはじめた雪を想像した。すると、私はまたいつの間にか、聖橋からニコライ堂へかけての雪景色や、降りしきる雪の姿を宙に浮き出して、神保町通りを進む救世

軍の、提灯の灯を見ていた。

勸工場という建物は、栄螺の殻の伏せたのを、大きく煉瓦づくりにしたとでも云うのであろうか。

三十年前の私どもの小学読本にも「勸工場」という一章があり、朧げな記憶をたどると、現在の百貨店と同様な職能を持ち、その名の通り日常品工業発達の一助を目的として設置されたという意味が、館内を見学して歩いている風な文書の中に、記されてあったと思う。

新橋上野の両博品館、神田小川町の南明倶楽部、本郷の何と私の知っているものだけでも数えられるし、地方の都会にもあったものだけでも聞いているが、此処で大きな栄螺の殻と云うのは、その頃の電車の車掌が「駿河台下東明館前」と告知した、その東明館のことだ。

小川町通りから一寸入った、五十稲荷の脇にも南明館という勸工場があったそうだが、深夜に火を発して消滅し、その折入口の大扉が閉ざされていた為に、住み込みの商人達が多勢焼死したという話を、子供心に怖しく思った記憶がある。私がものごころ付いた時分には、已に新築して同じ名の貸席になっており、琵琶が大層流行った頃で、有名無名の演奏会が連夜にわたって此処で開かれた。

そして、後年——私が十七八の頃、東明館も亦自火で焼失し、それ切りになって了った。

午前一時頃に東明館は焼け落ちたが、錦町にあった東京最古の活動写真館、錦輝館の火事も眼のあたりに見た。これは白昼のことであった。神田と云う所は、学校と古本屋と火事の、実に多い所であった。駿河台の明治大学記念講堂も新築間もなく烏有に帰したし、神保町に聳えた救世軍本部も焼けた。この他「神田の大火」というものに、私達はいったい何度出逢っているだろう。入学する間もなく普請にかかり、三年経って出来上った私の小学校は、落成式を済ませて一週間すると灰になって了った。皆んなで教室を間借りした西小川町の学校の方も、その後焼けている。残った所は、——残った所今度こそ震災の劫火が、ひと畚めに持って行った。

子供達が電車好きなのは今も昔も変わらない。私達は、その頃「街鉄」と「外濠」の判別出来ることを得意としていた。東京市の電車は、当初二つの会社が経営し、線を異にして競走したので、その名残りの、車体の相違を指して云ったものか、対立当時の線の方向をその儘言い慣わしたものか、それともその当時まだ合併していなかったものか、はっきりしないが、電車の型から、私は大層外濠最良であった。外濠は胴を明るい海老茶色に塗り、きちんと古風な帽子をかぶった感じで、海老茶の他の処は白に近い黄色が塗ってあったと思う。街鉄の方は車体に細かい筋が沢山あり、なんとなく町人めいて、両方とも車前に付けた金の救助網であり乍ら、この方は前掛けのような感じがした。外